

### <追悼文>三井嘉都夫先生のご逝去を悼む

佐藤, 典人 / SATO, Norihito

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

44

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2012-03-22

## — 追悼文 —

## 三井嘉都夫先生のご逝去を悼む

春の訪れを告げる桜、日本の象徴でもある桜、その『桜』が一輪、また一輪と花開くのを待ち詫びていたかの如く、また長年にわたり大学教育に携わった教壇生活を懐かしむが如く、三井嘉都夫先生、先生は新しい年度に踏み入った、まさに4月1日早朝、静かに黄泉の国へ旅立たれました。私たちは悲しみのあまり人目をはばからず慟哭すれども、先生は永久に還らぬ人となりました。

三井先生は、1922（大正11）年1月に静岡県富士郡今泉村（現在の富士市）に三井家の長男として生を受けました。先生は長じて生家の家督を継承する以上に、強い勉学への志を捨て切れず、10代半ばにして縁戚を頼りに上京して麻布中学に入学されました。その後、かねてより興味を抱いていた『地理学』の勉学を生涯の目標に据え、法政大学高等師範部地歴科に進まれたものの、戦時のため一時、その勉学を中断せざるを得なかったようです。戦後、兵役を解かれた先生は大学に戻り、法政大学文学部地理学科を卒業後、ほどなくして母校の地理学科に助手として採用されました。これが1950年のことです。その背景として、在学中からの先生の地理学に取り組む勉学の意欲が人一倍強かったことをして、恩師たちの心を強く捉えたと仄聞しております。以来、1992年3月に定年制度によって退くまで、先生は法政大学文学部地理学科の教員として、後進の教育に、あるいはご自分の研究に、そして大学内の行政に、一意専心されてきたことは、皆さんもご承知のことかと存じます。

ところで、先生の専らの関心領域は、地理学の中でも自然地理学、とりわけ「陸水学」でありましたが、それは単に陸水学という比較的新しい学問領域を研究の対象にしたということではありません。先生は「地域」という舞台上での「人間」と「自然」との関り合いを追究し、そこに展開する時間・空間的な分布現象の一般性と特殊性に着目する、いわゆる地理学特有の物の見方に立脚しながらも、それを大気圏、地圏、水圏を循環する『水』という指標の地表面での人間との関り合いに視座の中心を据えたのでありました。加えて、地理学だけに学問的活動の足場を置いていたのでは、自らの目的達成に十分でないとの見解から、周辺諸科学の研究者と積極的に学問的交流を図りつつ、地理学の存在意義を説く一方で、他分野からの助言にも



傾聴する真摯な姿勢が常に先生には伺われました。そこには諸科学の複合領域的性格を有する地理学こそ、ひいては地理学者こそが、学際的に取り組む必要性のある研究対象においては中心になるべきとの透徹した信念が一貫していたかと思われまふ。これこそ、今日、憂慮されている「環境問題」の深刻化によって、ようやく要請され始めた姿勢であります。先生はその必要性和重要性をいち早く洞察していたのではないのでしょうか？それゆえに地理学は当然ながら、土木工学や地球物理学、さらには生態学など他分野の研究者との共同研究や研究交流が自ずと先生の研究の足跡において目に止まります。これには、しばし（財）資源科学研究所の兼任研究員を務められたことも、プラスに作用していると想像するに難くありません。

僭越ながら、先生のご研究の一端にしばし触れてみたいと思います。火山国のわが国では、酸性河川、つまり毒水問題が利水上の課題となります。この実態解明と利水への提言がまず挙げられます。つぎに、河川洪水と水害に関する研究があります。戦後のわが国においては、台風や梅雨の集中豪雨によって河川災害が度々発生しました。先生はそのような河川洪水の前後に河川はどのように姿を

変えるのか、また被害の地域差に河川流域の諸条件がどのように関与しているのかなどに着目しました。とりわけ、狩野川洪水に焦点を当てた研究や渡良瀬川の同類の研究は、公表当時、土木関係者らに対して多くの関心を促しました。とくに、一度の洪水に伴う砂礫の移動を現地で実測した研究は、その結果は勿論、その純粋な実態重視の研究姿勢に多くの学問的興味を喚起するに十分であったようです。そこから着想が進展して、日本の河川の河床変動を全国的視野で研究され、その地域性に言及された成果は、先生の学位論文である「人為に伴う河床変動に関する地理学的研究」に集約されました。その後、わが国の河川下流部における塩水遡上の実態と利水問題への言及や、沿岸部での地下水揚水量と地下水の塩水化問題、あるいは沖積低地での地下水の過剰揚水と地盤沈下問題などを通じて、高度経済成長期における国や地方自治体の施策に提言を反映されました。その典型は故郷である岳南地域の地下水の問題でありましょうか？また河川水質に関する研究も見逃すわけにはいきません。それは、関東諸河川の水質の変化と土地利用の変遷を考慮して分析した内容に象徴されます。そうして先生はこれらを精力的に国際会議の場で世に問うてまいりました。

このような足跡を顧慮すれば、まさに自然、人文双方の事象に焦点を当てた極めて地理学的な視点に立脚した調査をしていると言えましょう。まさにそれは『地理学』の基本姿勢を具体的に体現しつつ、社会に貢献した研究内容と換言できるかと思えます。先生が学生時代以来、故多田文男先生をはじめとする、かつての日本の地理学界を代表する錚々たる先生方に薫陶を受け「現場に即した実証的研究」という研究姿勢の貫徹をそこに垣間見られますのは、とても自然な姿かも知れません。

かくの如く、先生は精力的に研究成果を積み重ねましたが、法政大学においても同様でありました。すなわち、学内において教育、研究の傍ら、大学院議長、文学部長、さらに学校法人・法政大学常務理事などの要職を務め、大学運営においても多大なる尽力をなされました。さらには伝統ある法政大学硬式野球部の部長としても、1974年以来、実に18年の長きにわたって務められ、東京六大学野球リーグ戦で計16回も優勝の美酒を味わいつつ、同部の名声を高められました。また法政大学と中国が合同で遂行した「タクラマカン砂漠探検調査」の隊長としても学術的成果を挙げられました。かつまた学外にあっては、科学技術庁資源調査会専

門委員を任せられ、加えて先生の居住する練馬区緑化委員会会長にも就任されました。学界においては日本陸水学会評議員、日本水文学会監査委員、日本陸水物理研究会会長などを歴任され、同時にこの間、専修大学や早稲田大学などをはじめ、多くの大学でも兼任講師として地理学の教鞭をとられ、その啓蒙と後進の育成に力を傾注されました。

この一連の学問研究、教育指導、学内行政、学外活動のいずれにおきましても、先生はその生涯の歩みにおいて、たゆまぬ成果をあげられ、皆さんご存じのように、1996年秋の叙位叙勲におかれましてめでたく『勲三等旭日中綬賞』を授与され、大きな集大成を取めるに至ったのであります。

このような活力に満ち溢れた先生の行動を支えたのは何だったのでしょうか？察しますに、その背後には温かな家庭が伺われました。奥様をこよなく愛されていたのは勿論、一男、二女のお子様達を心から慈しみ、とても朗らかな家庭の雰囲気は、私たちのお手本でもありました。数年前、ご子息・豊さんが仕事で赴任されていたイギリスへ奥様同伴で訪問されたことを、とても嬉しそうに話されたのが、つい昨日のように思い出されます。

人も羨むほど数多く、神宮球場のグラウンドで胴上げの感激を味わった先生へも、押し寄せる加齢の波は容赦してくれませんでした。あの喜色満面の笑顔を目にするのも、さらには、廊下の床を革靴でカッカッと力強く踏みしめる足音を耳にすることも、これからはもう叶いません。「先生とのお別れ」はかくも辛く無常で、とても悲しく、残念でなりません。

三井先生の教えを受け、その後塵を拝する私たちは、先生の足元に一步でも近づくべく、なお一層の努力を払う決意であります。私たち一同は、深い悲しみを胸に抱いて、今、先生とのお別れを惜しんでおります。三井先生、どうぞ生まれ育った故郷から、白銀の雪を被った霊峰・富士の雄姿を眺めつつ、安らかにお眠り下さい。謹んで「さようなら」を申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

また、ご遺族、ご親族の皆様には心から哀悼の意を表し、不肖・佐藤の三井嘉都夫先生への惜別の言葉に代えさせていただきます。

法政大学教授 佐藤 典人

[2011年4月4日の告別式における弔辞]